

市民の立場からの寄稿

鶴田真由 南米パタゴニア大紀行

～さいはての風が地球を救う～ 取材後記

佐瀬 英一

RKB毎日放送株式会社

福岡県福岡市早良区百道浜2-3-8

パタゴニアは南米大陸のチリ、アルゼンチン両国にまたがる南緯40度以南の地域を指す。日本からは飛行機で延べ30時間。現地では2台の車に分乗（スタッフは計9名）し、移動距離は14日間で実に3,000キロに及んだ。とにかく広い！あきれるほどに広い360度の地平線！「パタゴニアステップ」と呼ばれる砂地の乾燥土に鋭いトゲをもつ低草木が生い茂る。一直線にのびる道路を時速150Km前後の車で疾走する。しかし2時間たっても、3時間たっても同じ景色が続くのだ！我々はこの広大さに初めは感動し、やがてその単調さに飽き、ついには呆れてしまった。さえぎるものは何もない荒野・・・、遙かなる地平線・・・これがパタゴニアだ。



荒野を走るガウチョ

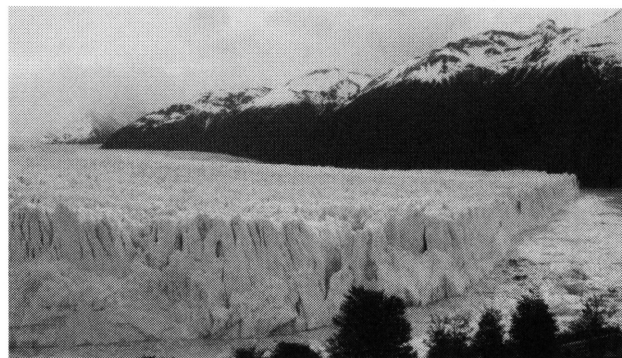
青い氷河に迫る危機！

パタゴニアは日本の約2.5倍という広大な土地に、わずかな住民（1平方キロ内に1人以下）が暮らし、いたるところに手付かずの自然が残る。そして、そのパタゴニアの自然を代表する氷河で、今年の7月大崩落がおき、温暖化の影響ではないかとのニュースが世界を駆けめぐった。実はこれまで真冬（日本とは四季が逆になる）のこの時期に崩れ落ちたことはなかったのである。一体、パタゴニアで何が起きているのか？我々の旅はまずこの氷河の実態を知ることから始まった。

ロス・グラシアレス氷河国立公園は大小合わせて50

余りの氷河があり、ユネスコの世界自然遺産にも登録されている。ニュースの舞台となったペリト・モレノ氷河はその中でも2番目に大きい氷河。高さ70m～80mの壁、全長35Km、幅5Kmにも及ぶ氷の川は、全体に青みを帯び亀裂の間からはより深く青い光が覗いている。その神秘的な輝きはまさに息をのむほどの美しさだ。

現地の氷河学の権威・ペドロロスバルカ氏によると、今回のペリト・モレノ氷河の崩落に関しては温暖化とは無関係とのこと。ペリト・モレノ氷河はむしろ成長を続けており、後退していない氷河（2つある）のうちのひとつだそうだ。しかし、パタゴニア全体の氷河のことを考えれば、後退のプロセスは確実に、しかも年々早くなっているという。実際、すでに消滅してしまった氷河をはじめ、公園内でも最大のウプサラ氷河は、1年に220m、この20年前間では約6Kmも後退しているとのことだった。



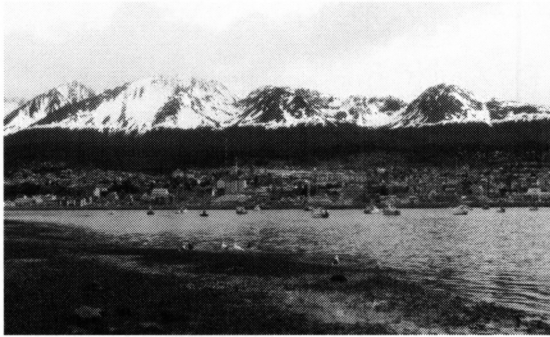
ペリト・モレノ氷河

最果ての海と命の営み

パタゴニア最南端の町、フエゴ島ウシュアイア。「火の大地」を意味するティエラ・デル・フエゴ州の州都だ。人口約6万4千人、南極から1000キロ足らずという世界最南端の町でもある。

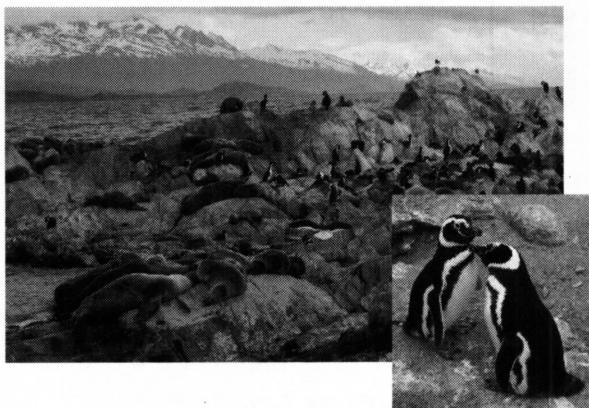
ウシュアイアから、ビーグル水道を巡るツアーが出る。

ビーグル水道は東の大西洋と西の太平洋をつなぐ水路でもあり、チリとの国境でもある。



世界最南端の町 ウシュアイア

オタリア（アシカ科）や、海鳥、ペンギンなどが生息するほか、クジラ、シャチ、などの海洋動物など最南端の動物や自然環境を見ることができる。特にペンギンはビーグル水道のみならずパタゴニアの大西洋沿岸全域にコロニーがあり、約200万羽が生息する。我々が訪れたカマロネスのカボ・ドス・バイア ペンギンコロニーでは5万羽のペンギンたちに出会うことができた。ちょうどつがいのカップルが交代で卵をあたためている時期にあたり、オスとメスが入れ違いで巣穴から漁に出て行く光景がユニークだった。ペンギンは一羽のオスに一羽のメスと決まっており、死ぬまでカップルは変わらないそうだ。すぐ目の前で二羽のカップルが仲良く毛づくろいをしている姿は微笑ましいかぎりだった。40日間でヒナがかえり、4月には親子でアルゼンチン海に帰っていく。しかし、管理責任者の話しによると、こうした豊かな動物たちの楽園も温暖化による海水温の上昇などで、餌場の距離や深さなど（より遠く、より深くなった）、その生態系に変化が出始めているということだった。



オタリアとマゼランペンギン

パタゴニアの風を世界へ

パタゴニア地方は、地球の自転に伴う強い偏西風が常に吹いている。太平洋からの風はチリとの国境を分けるアンデス山脈に大量の雪を降らせた後、乾燥した冷たい強風となって広い荒野を吹き抜ける。一年中やむことがなく、時には人間や動物が吹き飛ばされてしまうほどの強い風。そのため昔から「風の大地」とも呼ばれている。平均風速は秒速7m以上、中心部では秒速10mを超える所もあるという。そしてこの風を活かした風力発電事業がいま世界の注目を集めている。

地球温暖化対策の一環としてCO2削減が叫ばれる中、再生可能なクリーンエネルギーとしてこの風を使おうというのだ。日本の場合は、現地の州政府や関係機関との共同事業プロジェクト、すなわち、日本の技術力と資金が活用されたクリーン開発メカニズム（CDM）事業によって、風車村を建設し大規模な発電を行おうという計画が進行中だ。



風の象徴・南極ブナ（フラッグツリー）



風力発電公園 18基が稼働していた

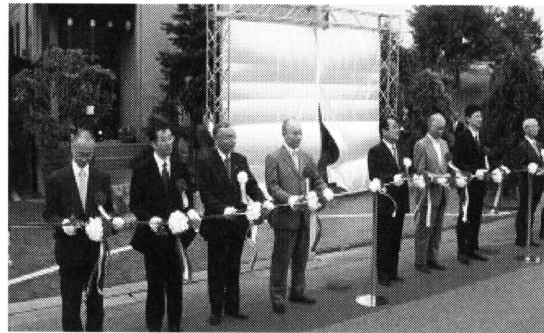
ただ、電力を生み出しただけでは役立つにも限りがある。そこで計画はさらに一歩進んだ内容となっている。大規模な風力発電を行い、その電力で水を電気分解して水素を取り出す。さらにそれを液体水素にして日本に運ぼうというのだ！水素エネルギー協会顧問の太田健一郎氏（横浜国立大教授）によれば、パタゴニアの風力発電で得られる電力は（設置台数：70万基～100万基）、

日本全国の電力総量の約10倍にも当たる。これで液体水素を作れば(1.9億t/年)、実に燃料電池車12億台分(現在、全世界の車は8億台)という莫大な量になる(ただし、日本水素エネルギー協会のロードマップによると、現在はまだ風況調査の段階であり、周辺のインフラの整備とも併せて進める必要があり、最初はまず小規模のウィンドファームの建設からになる。したがって本格的に計画が動き出すのは、2030年からとのこと)。まさに夢のような話ではあるが、もし実現すればパタゴニアの風は、まがいがなく地球温暖化防止の切り札として、重要な役割を担うことになるだろう。アルゼンチン水素エネルギー協会会長・ボルシッチ氏の「・・・パタゴニア、アルゼンチンからエネルギーの革命を起こしたい!」という言葉が印象的だった。



アルゼンチン水素エネルギー研究所 燃料電池車

ちなみに、日本独自の水素エネルギーの研究・開発も進んでいる。というより、(素人なりにだが)日本の場合はかなり世界をリードしているといえよう。車メーカーはすでに水素を使った燃料電池車を開発して実証・実験を繰り返しているほか、福岡県は九州大学を中心に国、企業の産官学が一体となって「福岡水素エネルギー戦略会議」を立ち上げた。水素の基礎研究から開発まで一体となって取り組むもので、水素に関してこれほど一貫性のある組織は世界でも類をみない。今年10月には世界最大規模の水素タウン、福岡・北九州間を水素の燃料電池車で結ぶ水素ハイウェイ構想など大がかりなプロジェクトもスタートした。

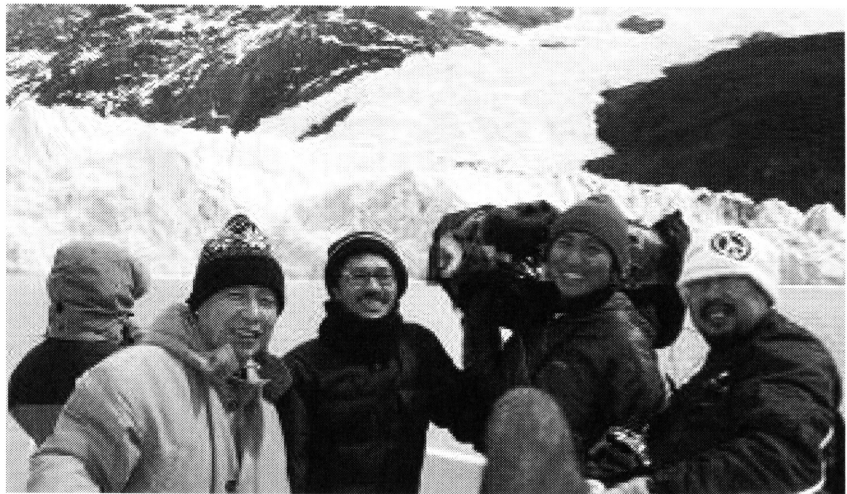


福岡水素タウン

家庭用燃料電池システムの設置式

終わりに：現地のリポーターを務めていただいた女優の鶴田真由さんは、旅の終わりの感想に「パタゴニアは音から入る・・・、氷河の崩落する音、氷河の中を流れる水の音、木々を揺らす風の音・・・、ひるがえって、人工物に囲まれた私たちの周りはいえ、雑音ばかりが耳に入ってくる・・・」と表現していた。これまで自然の音を“音”として、意識して聴いたことがなかっただけになるほどと思った。氷河や水の音、風の音、一つ一つが純粋な音として聞こえる。つまりはそれほどに自然が豊かなのだ。人々の暮らしにも、大半が自然と共存し、自然の一部として生きる姿勢がみてとれる。対して私たちの周りはどうだろう？確かに物質的な豊かさ、便利さに囲まれてはいる。しかし、

その代償として失ったものも少なくないように思う。パタゴニアのすばらしい自然に接したとき、あらためてそのことを思い知らされると同時に、環境を守ることの大切さを痛感させられる取材だった。



RKB取材スタッフ